

国連NGO横浜国際人権センター・うずしおブランチ T-over人権教育研究所・人権こども塾ニュース

人の世に熱あれ 人間に光あれ^⑬ ～なぜ部落問題を学んでいくのか～

信頼と尊敬の絆に支えられて語り合うよろこび

中学2年生からスタートした学年全体で語り合う部落問題学習、生徒一人ひとりの中に、部落問題を「ひとごと」ではなく「わがこと」として捉えていく学習へとつながっている。その証となったのが、全日本中学校道徳教育研究大会の特別公開授業であった。その授業に対する教師のささやき「授業者が部落の人だからできる」という言葉に対する語り合いは、生徒一人ひとりの深い学びへとつながっていく。



S・Nの語り

「本当のことを知らないことは、人間として惨めで、かわいそう」

私たちがあれだけ一生懸命頑張って発表して、周りの人とかがものすごい拍手をくれて胸がいっぱいになっていたあの中で、そんな人がおったと思ったらすごいショックでした。その人たちはちゃんと同和問題について学んでいなくて、学ぶ環境も周りになかったと思います。私たちから言わせてみたら、その人は無関心な人というのもあるけど、将来同和問題学習に対する本当のことを知らないでずっと生きていくのは人間として惨めで、ある意味で人間としてかわいそうだと思います。

K・Kの語り

「生徒の心の奥にある悲しみが見えなかったら同和教育はやっていけない」

昨日、佐藤文彦先生の書いた本を読んでいたら、本の中に「一見無邪気に見える子どもたちの表情の奥にある悲しみが見えないのでは、教育はできない」というのがあって、その言葉がすごく心に残りました。やっぱりそういう心の奥まで悲しみが見えなかったら同和教育はやっていけないんだと思いました。



Y・Iの語り「部落差別をしている先生は教えている生徒まで結局差別していることになる」

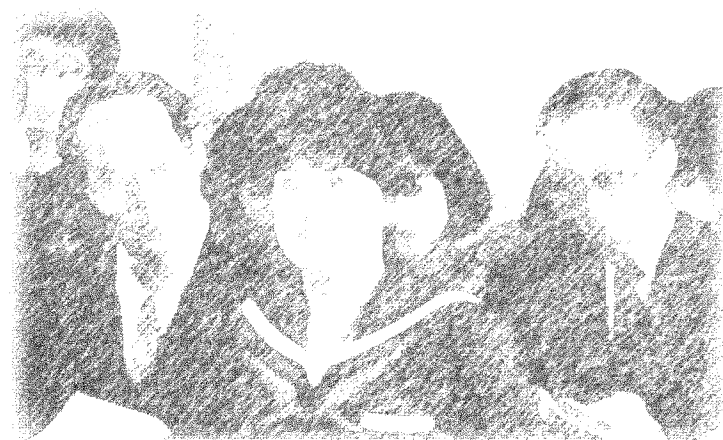
この前の授業のときも言ったけど、同和問題の学習に取り組んできたことによって、大人だけでなくいろんな先生の裏側まで見えてきて、先生というのは尊敬するものという気持ちもあるけど、部落差別をしている先生は自分が教えている生徒まで結局差別していることになるでしょう。

だから、先生不信みたいな感じになってきたんだけど、よく考えてみたら、私たちは森口先生に出会えてこういう授業をみんなでいっしょにやれたから、ちゃんと差別の本質までわかっているけど、その先生たちは自分のおじいさんとかおばあさんとか、親から部落の悪いイメージを吹き込まれたまま何が何だかわからない状態で教師になって、そのイメージをぬぐいさることができない状態にいるんじゃないかと思うんです。

だけどこの同和問題というのは考えてみれば本当におかしいことで、アメリカとかで人種差別とかがあるでしょう。それって見た目で黒人か白人か違いがわかるでしょう。その差別も絶対におかしいけど…。

でも部落差別ってほんまに区切りがあるように見えてないと思うんです。

先生から「ほんまに部落に生まれたと思うていてもその証拠がどこにも見つからなんだ」という話や、「自分が部落でないと思うていても自分が部落でない証拠もどこにも見つからなかった」という話を聞いたことがあるけど、ほんまにそうだと思うんですよ。何かその人の血が違うわけでもないのに、ほんまに自分が部落なんかどうか決定的な確証もなしに、人が勝手に「あの人が部落で、あの人が部落でない」と言って差別していくということはほんまにおかしいことだと思うんです。



本気の人権学習は、——「すべてを変える」

うずしおブランチ共同代表 森口 健司